村岡典嗣年譜——東北帝國大學文化史學第一講座着任から日本思想史學會成立まで（上）

池上隆史

【凡例】

・『日本思想史研究』（岡書院・岩波書店）…巻数を漢数字で、『一』『續』『增訂』（『一』の增訂）『三』『四』と略記する。

・『村岡典嗣著作集』（創文社）…巻数をローマ数字で、『Ⅰ』『Ⅱ』と略記する。

・『日本思想史學會會報』（日本思想史學會）…『會報』第〇號と略記する。

・『芭蕉誹諧研究』（岩波書店）他…『芭』『續芭』『續續芭』『新續芭』と略記する。

・『波多野精一全集』（岩波書店）…書名・巻数を『波・一』と略記する。

・『阿部次郎全集』（角川書店）…書名・巻数を『阿・一』と略記する。

・各年度の講義題目と、当該年度の補足事項は、「※」に記す。

講義題目は、原則的に、東北帝大以外で行われた講義のみ大学名を記した。

●一九二四（大正十三）年　四十歳（※年齢は数え年）

三月　ヨーロッパ留学を終え、帰国する。

四月二十五日　東北帝國大學法文學部（前年開講。）教授に就任し、文化史學第一講座を担當する。同日、教授就任に伴い、内閣より高等官五等に叙され、八級俸を支給される。

六月　「仙臺雜記」（狩野文庫・目録・抄録）

十六日　宮内省より、従六位に叙される。

八月　「抄ディルタイ・ヘルメノイティーク」

九月　重松信弘（1897—1983／愛媛）、東北帝國大學法文學部に入学（聽講生）。富樫文能と共に、日本思想史專攻の第一期生。

「國學に關する學問的興味は、東北帝國大學で山田孝雄先生村岡典嗣先生等の講義を拜聽し、且種々御指導を受けた時から持ちつづけてゐる。殊に山田先生から國學精神を、村岡先生からは國學の學問的意義殊に本居宣長の學問精神を、身にしみて承ることを得たのは、今から思へばこよなき幸であつた。その當時國學談話會〔1925.6 末～1934.9〕と云ふ會が出來て、屢學生卒業生等が互に研究發表をして、指導していただいたものであつたが、それもなつかしく忘れ難い思出である。約二十年前のことであるから、國學談話會の國學と云ふ名も何となく古めかしいやうに思はれたものであつたが、今日の學界思想界の動向からみて今昔の感に堪へないものがある」（重松信弘『國學思想（日本思想体系Ⅲ）』理想社・1943.7）。

同月　富樫文能（？—？／石川）、東北帝國大學法文學部に入学。

二十日　東北帝大に於ける初講義となる「日本思想史研究序論」を

講じる。

※　帝大では、普通講義・特殊講義・演習を行った。これらを「各一週二時間、年間約二〇週くらいを通例とした。講義は非常に速くかつ充実したもので、半年分の草稿は優に二―三〇〇頁の書物をなしえた。普通講義は毎年各時代の概説で何年かで一貫したが、三年に一回は専攻の学生の為にかならず研究序論（方法論）を講じた」（原田隆吉／『東北大学五〇年史　下』、1268頁）。

十月一日　「南里有鄰の神道思想」（『思想』第三十六號、岩波書店／→『一』）

十二月一日　「ぎやどぺかどる考」（『思想』第三十八號、岩波書店／→『一』）

六日　波多野より書簡（『波・六』、77～78頁）。「「思想」の御論文はずつと前に非常に面白ろく拝見しました。南里（とか言ひましたやうに記憶しますが）の神道説は日本文化史上面白ろい現象と思ひます。切り離して其自身に於て考へれば、思想の粗笨不徹底等の缺點の見えるのは免れますまい、歴史的背景のもとに見る時は、大いに光を増して來ます。さうしてその歴史的意義は貴兄の御説明によつて十分に解するのを得ました。然し貴兄のやうな凝つた念入りな立派な取扱ひ方が、日本の學問をやる人にわかつてくれるか、いさゝか心細いと感じました」。

七日　波多野より書簡（『波・六』、78～79頁）。「思想十二月號を讀みました。こん度のは私にはわからない處が少くなくあります。然し聖書の譯文は大變面白ろく思ひました。（中略）deus と anima との譯語について長らく爭ひがあつたといふやうにありましたが、爭點はどういふ所に存しましたか。暇の節一寸御示し下さいませ。多分、神其他の語を用ゐると原意の特徴箇性を失ふからといふのではありませんか」。

※　後に、村岡は講義などで、「明治以来の最大の誤訳は「神」だ」、と述べていた（古田武彦談）。

※【普通講義】「日本思想史研究序論」
【特殊講義】「神道史概論」（→『Ⅰ（神道史）』）

●一九二五（大正十四）年四十一歳

四月一日　「垂加神道の根本義と本居への關係」（『思想』第四十二號、岩波書店／→『一』）

五月二日　「日本思想史研究序論」開講。本講義のノートが、東北大学史料館「史料館展示室」に展示されている（2002.6 現在）。

六月末　山田孝雄と共に、國學談話會（～1934.3）を結成する。同會は、文化史學第一講座（日本思想史專攻）の学生と、國文學第二講座（國語學專攻）の学生を中心に、國文學・國史專攻有志も加え、研究発表や、訪書見学旅行などを行った。

「東北帝國大學法文學部内の日本思想史關係の會合としては、かねて國學談話會が存在した。同會は日本思想史と國語との圖の專攻者を中心とし、國文學または國史專攻の有志が參加したもので、大正十四年六月末に創立され、昭和九年三月まで繼いた。毎月一回一例會を開いて研究の發表を爲し、かねて親睦を計つた。その他新入生の歡迎會卒業生の送別會等を催し、その間大正十五年十月には秋田地方に、昭和三年十一月には足利や水戸に、六年四月には米澤に、見學訪書の旅行を試みた。創設以來山田村岡二教授が指導に當られ、また例會その他の會合には、岡崎〔義惠〕古田〔良一〕の二教授もしばしば出席された。

他方別にまた、村岡教授を中心として主として日本思想史專攻者の間に、毎週金曜日の夜に讀書會が催された。ウインデルバンドの獨逸文の論文を讀んだこともあつたが、昭和六年一學期からは正法眼藏隨聞記を讀み初め、一年余に亘つて讀終り、次で嘆異抄を用ゐ、第十章まで二回繰返して昭和九年三月四日を以て一先完了した（「會内消息」／『會報』第一號、30頁）。

金曜讀書會は、村岡の自宅で行われた。

七月七日　波多野より書簡（『波・六』、81～82頁）。「公の御仕事もだん〳〵と興味をまして行かれることは、何よりと心から御よろこび申します。山田（孝雄）氏の起用に成功されたことはさぞご滿足でせう。いや何と申しても、事實上から見れば、大學らしい大學は官立に限ると言つても過言でありますまい」。

八月　「本居の古事記研究年表」・「吉利支丹文學抄」（字集Ⅰ～Ⅲ）・「吉利支丹文學用語摘解」

九月　大森志朗（1905―?／福島）、東北帝國大學法文學部に入学（聽講生）。

「仙台の大学は、歴史学（五講座）と文化史学（二講座）を別々に置いていた。文化史学は思想史と美術史とであったが、小さい大学なので、それと国語国文学とで共同研究室を形作っていた。だから、直接のわたくしの師匠は村岡典嗣先生と山田孝雄先生とであった。こういう取りあわせの師匠を持つことができたのも小さい大学だからこそで、わたくしは随分贅沢な教育を受けたものだと思っている。

講義は、普通講義、特殊講義、演習と分れていたが、山田先生も村岡先生も、まだるっこい演習を学生に課するようなことはなく、すべて自分で講ぜられた。卒業してからも、助手や大学院学生として前後五年あまり大学に通ったので、わたくしは、山田先生の万葉集講義も、村岡先生の源氏物語講読も、五年あまり聴講している。その五年間に、山田先生の「万葉集講義」は巻三の中ごろまで、村岡先生の源氏物語は、参考書に指定されていた「源氏物語評釈」は花の宴までであるが、そんなところまでは行かなかった。――今の大学では万葉や源氏を五年も六年もつづけて聴く余裕はあるまい。それに、文化史という講座で源氏物語を講読する先生も、ありそうにはないと思う」（大森四郎『たったひとりの漱石忌』八坂書房・1975.7）。

「大森志朗君は、予が東北帝國大學にて日本思想史の講義を開いた當初、來り學ばれた一人である。日本思想史といふが如きは、今日に於いてこそやゝ用ゐられて來たものゝ、その頃は全く新しい學問であつた。卒業後君は暫し研究室に殘りて後、滿洲に渡り、奉天やその他で一二の敎化事業に携つたが、その間にも篤学よく研學を怠らず、終に建國大學に招かれ、今は敎授として講義を膽當してゐる」（村岡典嗣序大森志朗著『上代日本と支那思想』拓文堂・1944.1）。

同月　山田ひさ江（?―?／長野）、東北帝國大學法文學部に入学。

同月　宮本千代作（?―?／北海道）、東北帝國大學法文學部に入学。

一日「聖ばるらあんと聖じよさはつの聖御作業」（『思想』第四十七號、岩波書店）

※【普通講義】「日本思想史研究序論」

【特殊講義】「神道史概論」（→『Ⅰ（神道史）』）

【演習】「源氏物語講讀　解題」

●一九二六（大正十五）年四十二歳

四月三十日　宮城縣女子師範學校講師を嘱託される。

五月二十日　編・校訂書『吉利支丹文學抄』（改造社）

三十日　第一回芭蕉誹諧研究會。「『猿蓑』（きりきりすの巻）」（『思想』第五十八號・第五十九號、岩波書店・1926.8.1・9.1／→『芭』）。

※　芭蕉誹諧研究會について。「あれは私（阿部次郎）が未だ東京にゐる頃からのことであり、仙臺に來て淋しいので、一年後に小宮が（留学から）歸つて來ると二人で東京からのを續け興味ある人を入れた」。「芭蕉から西鶴、連歌、宗祇、古事記、日本書紀の歌謡などに及んだ。（中略）はじめは東洋館でやつたのではなく一、二度他所で例會を開いた。（中略）速記は學生にやつて貰ひ、談話も駄ジヤレも全て筆記させた。脚本的になつておもしろいものだつた」。（『阿・十七』、208頁）

「仙台の芭蕉会は阿部次郎、小宮豊隆、村岡典嗣、土居光知、岡崎義恵、太田正雄の面々が連歌の家柄の山田孝雄さん、時々仙台に見える小牧健夫さんも誘い込んで月に一遍「東洋館」〔仙台市太白区向山一丁目一番地〕か何かで輪講をやったあと宴会にしていた。その台所元を仰せつかっていたのが雑誌『思想』で、毎月その速記録を載せることになっていた。二度や三度なら座興として歓迎されそうな読物だと思うけれど、それが二年も続いた。（大正十五年八月号から昭和三年七月号までに十六回。後で岩波書店から『続』『続々』『新続』まで合せて四冊の『芭蕉誹諧研究』になっている。）「いい気なものだ」というのが内々の定評だったし、読者からも文句が出たそうで、『思想』の編輯をやっていた三木清や林達夫は持ちあぐんでとうとう岩波さんに頼んで断わって貰ったところが、岩波さんは逆にえらく「阿部小宮」に叱られたということだった」（河野與一『続　学問の曲がり角』岩波書店・1986.6）。

研究會は、総計四十四回、一九二六年五月三十日から、一九三〇年四月三十日までの四年にわたって行われた。

六月二十四日　波多野より書簡（『波・六』、82～83頁）。「拜啓貴著をいたゞいてありがたう存じます。「本居宣長」もおつつけ出版のことと御察致します。方面と特質とはかなり隔つて居るやうですが、Philologie の大切な二つの任務――Quellen〔資料〕の研究と歴史的叙述と――にあたる貴著が二つまで同じ年に出るのはよろこばしさの至りです」。

二十七日　第二回芭蕉誹諧研究會。「猿簑　きりぎりすの巻」（『思想』第六十二號、岩波書店・1926.12.1／→『芭』）。

「ゆうふめしにかますこ喰へは風薫」に対する、芭蕉の「蛙の口處〔くちど〕をかきて氣味よき」をめぐって。

義恵。　この附味は芭蕉の代表的なものでせう。「ひびき」「にほひ」でずばりと行ってゐます。

豐隆。　僕も實にうまい附句だと思ひます。

典嗣。　それはさうだろう。然し芭蕉が此句を作った時、芭蕉の脳裡にどういふ意識が動いてゐたかを僕は知りたいんだ。

（中略）

典嗣。　僕から見ると、感じ感じと君等がいってゐるのは、却って作者の想を抽象するものと思はれる。僕はもっと具體的にはっきりさせたいといふ気がする。

次郎。　感覚の直接な表現は、君、抽象ぢゃないよ。文學的立場から云へば、それが一番具體的なのだ。

典嗣。　具體的ぢゃないよ。句に含まれた實際のプロセッスを再現しないで、それで所謂感じがギギットになる、言換れば、眞の感じが了解されるとは僕は思はんね。（97～99頁／※頁数は、単行本による。）

七月二十日　第三回芭蕉誹諧研究會。「猿簑　きりぎりすの巻（つゞき）」（『思想』第六十五號、岩波書店・1926.3.1／→『芭』）。

二十一日　第四回芭蕉誹諧研究會（『思想』第六十六號、岩波書店・1926.4.1／→『芭』）

同日　第五回芭蕉誹諧研究會（『思想』第六十七號、岩波書店・1926.5.1／→『芭』）

八月二十日　内閣より、高等官四等に陞叙される。

二十三日　第六回芭蕉誹諧研究會。村岡が「發聲役」（『思想』第六十七號、岩波書店・1926.5.1／→『芭』）。

十月　國學談話會、秋田地方へ見學訪書の旅行。

一日　宮内省より、正六位に叙される。

十九日　第七回芭蕉誹諧研究會。「『續猿簑』」（『思想』第六十七號、岩波書店・1926.5.1／→『芭』）。

太田正雄を加え、この回より『續猿簑』を輪読。

同月中旬　「仙臺吉利支丹殉教史に關する一文書」（「きりしたん御せ

んさく覺」・元和十年）を、仙臺市で得る。
十二月十九日　第九回芭蕉誹諧研究會。「『續猿簑』松露の卷」（『思想』第六十八號、岩波書店・1926.6.1／→『芭』）。
※【普通講義】「神道史概論」【特殊講義】「日本史學史」
【演習】「源氏物語講讀」「古事記講讀」

●一九二七（昭和二）年　四十三歳

一月二十三日　第十回芭蕉誹諧研究會。「『猿簑』松露の卷」（『思想』第六十九號、岩波書店・1927.7.1／→『芭』）。
二月一日　「仙臺吉利支丹殉教史に關する一文書と其解説」（『改造』第九卷第二號、改造社／→『一』）
十四日　波多野より書簡（『波・六』、83～84頁）。
「公の御生活についてはいつもよい御知らせのみいただいて、私まで滿足この上ありません。山田（孝雄）氏の教授任命の如き、貴兄の御盡力によるは勿論ですが、情實に囚はれぬ東北大學に對しても尊敬の念を禁じ得ません。
「本居宣長」もいよ〳〵夏休みには御出版の運びの由、よろこばしく存じます」。
二十日　第十一回芭蕉誹諧研究會。「『續猿簑』松露の卷」（『思想』第七十號、岩波書店・1927.8.1／→『芭』）。
三月　重松信弘、學士試驗合格。卒業論文「源氏物語に現はれたる思想の一考察」。
※　重松は、一九二九年、宮城縣女子專門學校教授に就任した後、一九三九年からは、旧滿洲國建國大學教授。戦後は、郷里の愛媛県青年師範学校（1948）・愛媛大学（1949）で教鞭を執り、晩年は皇學館大學で講じた。
同月　富樫文能、學士試驗合格。卒業論文「古史傳の成立及びその思想的背景」。
富樫は、この後京都の大谷中學校教諭兼主事に就任する。
十三日　第十二回芭蕉誹諧研究會。「『續猿簑』松露の卷」。
村岡の担当（『思想』第七十三號、岩波書店・1927.11.1／→『芭』）。
四月二十日　「ぎやどぺかどる解説付關係事項年表」（與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子編纂校訂・日本古典全集第二期『ぎや・ど・ぺかどる』上卷、日本古典全集刊行會）
「ここに刊行する所は、予が往年、大英博物館文庫東洋研究室にて筆寫し、更に巴里（國民文庫）本にて落丁一葉を補へるものなり」（3頁）。
二十六日　第十三回芭蕉誹諧研究會。この回から、「『續猿簑』「柳」の卷を輪読（『思想』第七十四號、岩波書店・1927.12.1／→『續芭』）。
五月一日　「愚管抄考」（『思想』「五月特輯號　日本文化研究」／第六十七號、岩波書店／→『一』）
十五日　第十四回芭蕉誹諧研究會。「『續猿簑』八九間雨柳の卷」（『思想』第七十六號、岩波書店・1928.2.1／→『續芭』）。
六月十二日　第十五回芭蕉誹諧研究會。「『續猿簑』八九間雨柳の卷」（『思想』第七十七號、岩波書店・1928.3.1／→『續芭』）。
七月十七日　第十六回芭蕉誹諧研究會。「『續猿簑』八九間雨柳の卷」（『思想』第七十八號、岩波書店・1928.4.1／→『續芭』）。
八月　講演「德川時代に於ける古代主義の思想」（文部省夏期講習會）
九月　高柳桃太郎（?―?／神奈川）、東北帝國大學法文學部に入学。
秋頃　大森志朗、卒論の執筆について尋ねるために、村岡の研究室を訪れる。
「卒業論文というものを書く学年になって、先生の研究室をノックすると、先生は、
「二十枚ぐらいでいいでしょう。そんなに書くことはないはずだ。今までの人の言っていることは書くに及ばない」
とおっしゃる。一年がかりで調べることを、たった二十枚―八千字以内でまとめろというのだ。殺生な、と思ったが、短くまとめるこ

とは、たいへんな修練になった。それでも二十枚には納まらなかった」（大森志郎／上掲書）。

十月　「史學者としての伴信友」（ノート）

十一日　第十七回芭蕉誹諧研究會。「『續猿簑』八九間雨柳の巻」（『思想』第八十號、岩波書店・1928.6.1／→『續芭』）。

十一月一日　「本居が源氏物語螢の巻の一節の解釋」（『思想』第七十三號、岩波書店／→増訂『本居宣長』）

同日　「本居宣長の古傳説信仰の態度」（『民族』第參卷第壹號、民族發行所／→『一』）

五日　講演「近世史學史上に於ける國學の貢獻」（於京都帝國大學史學研究會大會）

二十日　第十八回芭蕉誹諧研究會。「續猿簑　八九間雨柳の巻」（『思想』第八十一號、岩波書店・1928.7.1／→『續芭』）。

『思想』誌上での連載は、この回をもって終了する。

二十四日　「近日は村岡君の來遊を好機會に大奮發をして比叡山の山越えを決行しました」（波多野→石原謙宛書簡／『波・六』、200頁）。

十二月　「漢譯聖書源流考」（『廣島高等師範學校歴史地理學會會誌』／→『一』）

十八日　第十九回芭蕉誹諧研究會（『續芭』）。この回から、『ひさこ』の「花見」の巻を輪読。

※　村岡は「方法論を三年に一度は講義し」（原田）ていたが、中でも「方法論は昭和二年の講義がもっともくわしい」（→『Ⅳ（日本思想史概説）』）。

講義では、文献学的研究法の他に、思想史学の体系化を志向して、歴史というテーマにも比重をおいて論じている。

※【普通講義】「日本思想史研究序論」（→『Ⅳ（日本思想史概説）』）【特殊講義】「日本近世史學史」【演習】「宇治十帖」「徒然草」「J・ワッハ『ダス　フェルステーン』」（※ Joachim Wach, *Das Verstehen: Grundzuge einer Geschichte der hermeneutischen Theorie im 19. Jahrhundert.*／全3巻 1926-33刊）

●一九二八（昭和三）年　四十四歳

一月一日　「近世史學史上に於ける國學の貢獻」（『史林』第十三巻第一號、史學研究會／→『一』）

二十三日　第二十回芭蕉誹諧研究會（『續芭』）

二月五日　「賀茂眞淵」（岩波講座『世界思潮』第一册、岩波書店／→『一』、「思想家としての賀茂眞淵と本居宣長」の「上」。）

十九日　第二十一回芭蕉誹諧研究會（『續芭』）。村岡の担当。

三月　大森志朗、學士試驗合格。卒業論文「石門心學の教説」。

同月　山田ひさ江、學士試驗合格。

大森は大學院へ進学し、村岡の指導のもと、「日本中世思想史」の研究に従事する。山田も日本思想史專攻で再入学し、引き続き東北帝國大學で学んだ。

※　大森は、大學院課程修了後、一九三三年、旧滿洲國大連の滿鐵撫順圖書館館長に就任（～1937）。その後、同國建國大學教授を経て、戦後、東京女子大学教授に就任している。

同月　宮本千代作、學士試驗合格。卒業論文「神皇正統記に現れたる北畠親房の思想」。

八日　岩波書店で、従業員による労働争議が勃発。十三日からは、業務停止となる。争議が解決し、業務が再開されたのは、二十二日であった。

十日　増訂『本居宣長』（岩波書店）刊行（1934再版）。

「蔭著は、著者が、未だこの方面の學問を、生涯の仕事としようとの決心もつきかねてをった時分、かつまた、世界大戦の犠牲となつて癈刊した、横濱の一外字新聞〔*Deutsche Japan-Post*〕の飜譯記者を主な職として、殆んど全き一日の休暇をも有しなかった、閑のない生活状態の間に試みた研究とて、資料の聚集とて十分でなく、

かつ習作らしいところが脱しかねてをり、今日十分に改めようようとすれば、或は全く書換ねばならぬと思はれるが、今はその暇も有しない」(1頁)。

※ 奥付によれば、住所は「仙臺市北一番町二十九番」。同地は、現在(1970 〜)の仙台市支倉町二丁目、広瀬側を望む川沿いの土地にあたる。

村岡は、その後、弓ノ町四十二(若林区)へ移転するが、東北大学文学部の第「225」号履歴書(没後作製?)には、「仙台市北五番丁六十六番地」(現仙台市木町通二丁目三番地辺り。仙台市立第二中学校正門前。)という住所も見いだせる。北一番町と共に、東北帝國大學病院の近辺である。

十一日 第二十二回芭蕉俳諧研究會(『續芭』)。村岡はやや遅れての参加。

四月 東北學院大學講師に任ぜられる。

同月 三浦なを(1900 — 1985 /※青山なを・東京)、東北帝國大學法文學部(日本思想史専攻)に入学(高等學校卒業資格取得の後入学。)。

三浦は、東京女子大學國文學科に在学(1919 〜 1923)中、垣内松三、沼波武夫の薫陶を受け、学究の道へ進む志を立てる。大正大地震、父の死を経て、一九二八年、早くから女子学生へ門戸を開いていた(1913 〜)東北帝大に入学する。

「昭和三年、東北大学法文学部に進学、念願であった学問研究に打ち込むことができた。村岡典嗣教授のもとで、日本思想史を専攻、さらに文学を通じてみた日本思想史から日本女性史という新しい学問のひろがりが見えてきたのである。卒業論文「源氏物語における女性精神の展開」を山田孝雄並びに村岡典嗣両教授に認めていただいたことはこれからの自分の生き方に大きな励ましとなり、大学院における一年間は、日本女性精神史の研究にあけくれた」(青山「あとがき」/『青山なを著作集 第四巻』慶應通信株式会社・1983.12)。

※ 「青山〔なを〕さんは昭和の初年東北帝国大学法文学部に入学され、亡父(典嗣)の教室で日本思想史学を学ばれ、その後はずっと家庭的なおつきあいをしていたので、宅などでお目にかかったことはたびたびあり、とくに亡母〔起家〕(昭和四十三年没)は生涯一方ならぬお世話になっていたようである」(村岡哲『史想・随想・回想』太陽出版・1988.9、287頁)。

三日 波多野より書簡(『波・六』、84 〜 85 頁)。「「本居宣長」も例の騒動〔1928.3.8〕で出版がおくれはしませんか。いつぞやいたゞいた論文は讀みました。同じ問題に對してちがつた人の取る態度がちがつて居て、それが一々 type を代表して居る點が特に興味を惹きました。貴君の御説のうちでは——はつきりとは覺えて居ませんが——源氏物語と比較して對象の眞實性について區別を立てられた點があつたかと記憶しますが、その點が巧妙でもあり適切でもあると感じました。いつぞやの御講演はまだ御發表になりませんか。論文集の御計畫はどうなりましたか(新村君の紹介の書店の方がよいやうな氣がします)」。

五日 「本居宣長」(岩波講座『世界思潮』第二冊、岩波書店/→『一』)、「思想家としての賀茂眞淵と本居宣長」の「下」。)

二十一日 第二十三回芭蕉俳諧研究會(『續芭』)

五月 國學談話會が、岡崎義惠と國文學第一講座(國文學專攻)の学生たちからなる、日本文學の會と合流、日本學の會を結成する。

しかし、翌月には同會は解散し、國學談話會が、再度文化史學第一講座と、國語學第二講座とを中心にした組織として復活する。

二十六日 第二十四回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)。この回から、『猿簑』を輪読。

六月 「仙臺吉利支丹史の研究第一 年表」

二十二日 第二十五回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)

七月五日 「日本思潮」(岩波講座『世界思潮』第四冊・第八冊(11.23)・第十冊(翌年 2.8)、岩波書店/→『四』)

「問題とするところは、日本思潮の學問的闡明であつて、日本主義の國民道徳的主張ではない」(3頁)。

二十二日　第二十六回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)。村岡の担当。

八月　講演「仙臺地方の吉利支丹について」(於仙臺市文化講座)

九月　山本信道(?―逝去/岡山)、東北帝國大學法文學部(國語學専攻)に入学(聽講生)。

「私は入学前に高等女学校の教員を五ヶ年し、結婚もしていました。〔仙臺では〕友人が居た家を借りることにして、向山越路に五年ばかり住み、後に柳町に転宅しました」。

「私は広島高師で村岡典嗣先生の御講義をただ一回だけ承わったという関係で日本思想史を専攻しようと考えたのですが、学問的でないので恥ずかしいことですが、山田孝雄先生のお人柄に強く引かれて、国語学専攻を考えて、青山さんと同年〔1931.7〕に国語学専攻で卒業し、日本思想史は再入学によって翌年〔1932.7〕卒業しました。その頃は再入学は一ヶ年でも、十単位以上をとりその専攻のための必要科目に合致し、論文に合格すればよかったのです。日本思想史専攻卒業者には重松信弘博士、大森志郎博士、高山〔高柳〕桃太郎氏などがあり、その人たちと、村岡先生のお宅で正法眼蔵随聞記などを講読したり、国学談話会などに出席しました」(山本信道「青山なをさんの憶い出」/『追想青山なを』慶應通信株式会社・1986.9)。

三十日　第二十七回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)

十月　講演「國民思想史」

一日　「仙臺以北に於ける吉利支丹遺跡――傳説と史實――」(『改造』第十巻第十號、改造社)

三日　東北帝大の教授、学生(三浦なを他)らと上野國多胡碑を訪れ、記念写真を撮影する(『追想　青山なを』)。

十四日　第二十八回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)。

十一月　國學談話會、足利・水戸に見學訪書の旅行。

十一日　第二十九回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)。この回から、『炭俵』を輪読。

一六日　昭和三年勅令第百八十八號により、賞勲局から大礼記念章を授与される。

二十三日　「日本思潮(二)」(岩波講座『世界思潮』第八册、岩波書店/→『四』)

十二月二十三日　第三十回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)

※【普通講義】「日本思想史概論―儒佛耶及び神道交渉の見地より観たる―」(→『Ⅳ(日本思想史概説)』)【特殊講義】「林羅山の研究」「思想史より観たる萬葉集と古今集の比較」【演習】「宇治十帖・徒然草」【他大学での講義】「日本思想史概論―文學的観察を中心として―」(東北學院大)

●一九二九(昭和四)年　四十五歳

一月二十日　第三十一回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)

二月八日　「日本思潮(三)」(岩波講座『世界思潮』第十册、岩波書店/→『四』)

二十四日　第三十二回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)

三月一日　内閣より、高等官三等に陞叙される。

十五日　宮内省より、従五位に叙される。

二十日　『芭蕉俳諧研究』(岩波書店)

二十三日　第三十三回芭蕉俳諧研究會(『續續芭』)

四月二十八日　第三十四回芭蕉俳諧研究會(『新續芭』)。この回から、『江戸三吟』の百吟一巻と、『みなし栗』を取り上げ、談林派時代の芭蕉の研究を行う。

五月十九日　第三十五回芭蕉俳諧研究會(『新續芭』)

六月十七日　講演「紅葉山人と源氏物語」(於東北帝國大學文藝部大會)

二十二日　第三十六回芭蕉俳諧研究會(『新續芭』)

七月二十一日　第三十七回芭蕉俳諧研究會(『新續芭』)

九月一日　「紅葉山人と源氏物語」（『心の花』第三十三卷第九號、竹柏會出版部／→『一』）

十日　文部省より、東北帝國大學附屬圖書館長に補任される。村岡は、「大学図書館の仕事に携わったこともあって書誌学にも関心を持っていた（中略）。珍本、稀観本といった古本あさりはほとんど唯一の道楽であり、この種のものも永年の間にかなり手に入れてはいたが、それは決して道楽のための道楽ではなく、いずれも専門の上から価値あり必要なものに限られていた」（村岡哲、218頁）。

村岡が、第三代館長として就任した「このころは館務も一応平常化され、建設期から一歩進んで図書館の充実をめざし、躍進すべき時期に入った」。

「村岡館長は法文学部で日本文化史を講じていただけに非常な愛書家で、和漢の典籍に通じ、特に吉利支丹文献に興味を持っていた。図書館の事務室に出入して、館員や古本屋を相手に古書を語ることを好み、館員のピクニックなどにも何時も喜んで同行するといった明朗恬淡な人柄であった」（『東北大学五〇年史　下』、1694～1695頁）。

十月　哲、第二高等學校文化乙類に入学。

五日　第三十八回芭蕉俳諧研究會（『新續芭』）。村岡は、やや遅れての参加。

十一月二十三日　第三十九回芭蕉俳諧研究會（『新續芭』）。村岡の担当。

十二月二十二日　第四十回芭蕉俳諧研究會（『新續芭』）。

※【普通講義】「國學史概論」【特殊講義】「近世國文學史」（元禄まで）【演習】「源氏物語と徒然草」

●一九三〇（昭和五）年　四十六歳

一月　「抄司馬江漢に關するもの」

十九日　第四十一回芭蕉俳諧研究會（『新續芭』）。この回から、『みなし栗』を輪読。

二月　「古神道と古學神道」（『宗教講習録』）

講演「國民道德思想の歴史的發展」（於文部省中等教員講習會）

二十日　『續芭蕉俳諧研究』（岩波書店）

三月　「圖書館めぐり」（東洋文庫・無窮會・帝國圖書館）

同月　山田ひさ江（文學士）、學士試驗合格。卒業論文「光源氏の評價に見ゆる紫式部の立場について」。この後、山田は、長野縣女子專門學校教授に就任している。

同月　高柳桃太郎、學士試驗合格。卒業論文「蕃山の研究」。

この後、高柳は東北帝國大學囑託として引き続き研究に従事した。

二日　第四十二回芭蕉俳諧研究會（『新續芭』）

二十八日　第四十三回芭蕉俳諧研究會（『新續芭』）

四月二十四日　三浦なを、日本思想史特殊講義単位論文「本居宣長のもののあはれ論」脱稿。

十五日　「新井白石の一書簡とその解説」（『史學研究』第一卷第三號、廣島史學研究會／→『一』）

二十日　第四十四回芭蕉俳諧研究會（『新續芭』）

六月二十一日　第一回西鶴俳諧研究會（『俳句研究　創刊號』第一卷第一號、改造社・1934.3.1）

本月より、『芭蕉俳諧研究』のメンバーによる、井原西鶴『大坂獨吟集』の「西鶴獨吟百韵」の輪読が始められる。談林俳諧の解明を目指した輪読会は、翌年六月まで続けられ、『俳句研究』（第一卷第一號～、改造社・1934.3～）に掲載の後、加筆の上、改造社より刊行された（1935.7.20）。

二十五日　校訂書、司馬無言『天地理談』（岡書院）

八月　松阪で催された「本居翁生誕二百年記念講習會」に参加する。また、この月に「松坂行抄録」を作成。

講演「本居宣長の古道」（於三重縣教育會夏期講習會）

九月一日　「農村の生んだ一國學者鈴木雅之」（『思想』「第百號記念特輯」／第百號、岩波書店／→『一』）

十一月十五日　『日本思想史研究』（岡書院）

「所収の十數編、もとより相應長い年月の間にその時々に記した所とて、今に於いて多少とも補正の必要を覺えるものなしとせぬが、（中略）凡てこれらの改訂や整理は、やがて公けにしたいと思つてゐる概論的著作に、之をゆづる」（1頁）。

「本編」「附載」（『增訂』の、「附録」の章にあたる。）と、「附録」、索引（人名索引・書名索引・特殊用語索引）からなり、圖版三点がこれに加わる。

「附録」には、南里有鄰『眞教概論』が収められる。

後、更生閣より再版（刊行年不明）が、岩波書店からは增訂版（1940.10.28）が出版された。

十二月　卒業論文審査。三浦なを「紫の上と浮舟との比較よりみたる源氏物語」を試問。

「『源氏物語』についてなお本腰をすえて勉強しようとの覚悟が出来たのは、数えてみると昭和五年十二月、卒業論文の試問がすんだあとであった（卒論のテーマは「紫の上から浮舟へ」であった）

主査は村岡典嗣先生で副は山田孝雄先生であった。

その当時私は村岡先生とも特別に親密ではなく、ことに卒業論文については何の相談もしていなかった。相談して先生から何かの指示を受けたとしても、私は私の考えで、私のやり方でするより今更すべのない事が自分で明瞭であったから、万一、考え方の変更を求められた時の双方の困惑を思ったから、黙って出すつもりであった。勿論それは先生に反抗の心からではなく、不断の教えはそのまま納得し、更に理解しようとつとめていたが、万一の時ののっぴきならない場合を考えてそれを避けたのである。ところが結果は、私の予想しなかったはげましと理解とを受けたのである。それによって私は自分相当のささやかな自信をもち、励ましとつつしみとを得、その後の私の支えを得たのであった。

村岡先生はいわれた。女の人でないと思いつかないところだ。作中の人物のみでなく、作者もまた書く事によって発展するというのだろう。これで態度はよいと思う、といわれた。（中略）村岡先生から論文の主題のとらえ方、構想、論述の仕方を認められたこと、山田先生がよく読んでいるとおっしゃって下さったこと、いずれも私にとっては予期しない最上の言葉であった。ほめすぎという気がして、私はこの事を誰にも今まで言ったことはない。村岡先生はこの後、温泉からたった一度の手紙を下さった。論文をほめ、励まして下さった手紙であった。私が女だから心を遣って下さったのであろう。この事を私は誰にも言わなかったが、これがそれから後の私の励ましとなっているのである。その後の私の貧しい道ながら歩んできた力であった」（青山なを「源氏物語と私」／『青山なを著作集　第一巻』慶應通信株式会社・1983.5）。

六日　第二回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一巻第二號、改造社・1934.4.1）

※【普通講義】「日本思想史研究序論」（→『Ⅳ（日本思想史概説）』）

【演習】「近松研究」「古訓古事記」

●一九三一（昭和六）年　四十七歳

一月二十四日　第三回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一巻第三號、改造社・1934.5.1）

二月　三浦なを『國語と國文學』寄稿論文「源氏物語に於ける女性精神の展開」（1932.12.1）を閲了する。

二十五日　『續續芭蕉俳諧研究』（岩波書店）

二十八日　第四回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一巻第四號、改造社・1934.6.1）

同日　松本彦次郎「村岡氏の近業「日本思想史研究」」（「書評及紹介」／『史潮』第一年第一號、大塚史學會）

三月　三浦なを・山本信道、學士試驗に合格。三浦は大學院へ進学、山本は再入学し、村岡のもとで日本思想史を專攻した。

八日　東京美術學校で、佐佐木信綱らが印行した「萬葉祕林」（萬葉集の古鈔本等十一種）の、完成記念展覽會が開催。
　午後から行われた、佐佐木他の記念講演を聽講。
二十七日　第五回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一卷第七號、改造社・1934.8.1）
四月　國學談話會、山形縣米澤に見學訪書の旅行。
同月　日本思想史金曜讀書會（於村岡典嗣宅。夜。）
　研究発表の場としての國學談話會の他に、「村岡教授を中心として主として日本思想史專攻者の間に、毎週金曜日の夜に讀書會が催された」。「昭和六年一學期からは正法眼藏隨聞記を讀み初め、一年余に亘つて讀終」る（「會内消息」／『會報』第一號、30頁）。
同月　三浦なを、大學院に進学。村岡の指導のもとで「女性精神史」の研究に従事する。
十五日　廣島文理科大學臨時講師を嘱託される。
十七日　第六回西鶴俳諧研究會。村岡の担当（『俳句研究』「子規特輯」／第一卷第八號、改造社・1934.9.1）。
五月二十九日　第七回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一卷第八號、改造社・1934.10.1）
六月二十八日　第八回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一卷第九號、改造社・1934.11.1）
七月二十九日　文部省圖書館學講習會（於法文學部第三教室／八月七日迄）で、「吉利支丹版ニ就イテ」を講じる。
八月　橘靜二、逝去。享年四十五歳。
九月　淺野明光（?―逝去／愛知）、東北帝國大學法文學部に入学。
十月四日　第一〇次帝國大學附屬圖書館協議會（於附屬圖書館本館）に、出席（七日迄）。
二十七日　國有財産管理規定第十六條によって、圖書館構内國有財産監守に任ぜられる。
十一月二十八日　講演で訪れた長野縣から、三浦なをへ書簡を送る（『追想青山なを』）。
　「さて此度御許のあゝいふ立派な論文をかゝれ世にいて候事は小生としてもまことによろこはしく候　我大学の日本思想史專攻者の間に於いても殆と初めて本格的の思想史的論文をえし事と存し候あまつさへ広く見ても源氏を思想的に取扱ひし論文はいと少くその点からも御許の成効は注意を喚し候　自らいふはいさゝか異様にひゝき候はむも小生の学問をよく会得理解されてその上に少なからぬ創意をさへいたされ候事かへす〳〵もよろこはしく候　思ふに東京の方の御話も順調にすゝむへく小生も心からそを期待いたし候　来年もなほ大学院に進学あらむ事はのそましくかつ当地をさらるゝ事は残りをしく候へとも種々の事情を考へてすら〳〵ときまらは東京に定住され母君や弟妹の君達と相近く御くらしの事よろしからむと存する次第に候　それにしてもさうなりてもなほ研究はとこまてもつゝけられてこの度の業績を第一歩としてつき〳〵に学界に歩みをしっかりと進められむこと希望にたへす候　御許か女性の御身としてのくさ〳〵の困難も御行事の少なからさるへき事は御察候へとも折角よくそれに打克たれて学問の道に御精進あらむ事を祈りつゝ御許か研学の態度の真面目にして深刻なる処は敬服のいたり此上はその傾向をます〳〵発展さるゝとともに漸次に多読知識をひろくもとめらるゝやうつとめられたく候　我々としてよき学者を養成することの上越すまではなき事申すまても無之候たま〳〵御許にその希望を見出しゝこと本懐の至りに候」
十二月一日　三浦なを「源氏物語に於ける女性精神の展開」（『國語と國文學』第八卷第十二號、國語と國文學編輯部）
※【普通講義】「日本中世思想史」（→『Ⅳ（日本思想史概説）』）
【特殊講義】「特殊研究」【演習】「古訓古事記」
【他大学での講義】「倫理學講義」（廣島文理大）　（以下次号）

（東北大学大学院文学研究科博士課程後期）